秋季大会を顧みて

講演企画委員会

（昨年10月29日，大会第三日夜，京都大学楽友会館に於て行なわれた座談会のまとめである．討論は極めて熱心に行なわれたが，時間の都合で出席されなかった方々には意見を書面で出していただき，それらもここに含めてある）

座談会参加者　稲浦，橋本，菊地（大阪管区）勝井（京都地方気象台）中島，森山（京大），渡辺（和），矢野（気研）大井，藤原，内藤，小沢，清水，舘（委員）

書面参加者，成川．古郷，竹内（大阪管区）佐橋（岡山大）坂上（九大）相馬，根本，村井（気研）駒林（気大）菊地（北大）

I. 各分野の内容について

1. 綜観気象．メソ気象はケーススタディが多く，座長はまとめにくいが，まとめて討論するには余りにも時間がつまり過ぎていた．現業の人々の出席が少く，その立場からの討論もなかったのが惜しい．現業的な研究の発表ももっと奨励さるべきではないか．

2. 境界層．水面との相互作用によるものが多かった．相模湾の観測塔を利用してやったものは，この種のものが他に少ないため，今後の推進が望ましい．霞ケ浦や観測船による共同観測結果では，水面附近の運動量，熱量，水蒸気量の輸送が扱われている．今後の問題は平均流が三次元の場合の鉛直輸送算定の誤差の問題であろう．大気と表面海水中の CO_2 の分圧の分布の二つの研究は興味があった．風のスペクトルの形そのものは大分判って来たが，放射に関するプランクの理論のような，統一して記述できる理論がほしい，と云う意見があった．

大気汚染やエリマン層の研究が多くなったのは，社会的，学問的要請からであろう．然し観測手段の遅れ，理論面の弱さのために，この方面はまだ弱い．接地層の研究は従来の理論の拡張が多く，独自の理論は少なかった．それを実証すべきデータ，その開発を捉すようなデータも不足で，群盲象をなでる様だとの意見も出た．免に角観測で実体を把握することが極めて必要で，手の届きそうな所が未知なのは不思議な気もする．綜観の方に入れたいものもあった．会場が満員なので，今後この点に留意されたい．討論は盛んだったが，多少秩序に欠けていたこともあり，この点考える必要がある．

3. 大気電気及応用気象．内容的にバラエティーに富み興味あるものが多いのに拘らず，人が少い，応用気象と云う分類法に問題があるようで，もっときめ細かく考えて貰いたい．

4. 超高層及気象衛星，オゾンの問題が多かった．昔あった太陽活動コロキウムのような場を使っての討論が欲しかった．気象衛星は今後の問題であろう．

5. 気候．発表は家族的で楽しい会であったが，学問的な点や，目的等について，もう少し討論があってもよかったのではないか．

6. 雲物理，今後大いに発展すべき分野である．物理化学的クリマトロジーとも云うべき新分野が出て来た事は喜ばしい．吸湿性，非吸湿性粒子の行動，雲粒と氷晶との行動についての研究の第一段階は一段落した感じがする．粒子，雲粒，氷晶間の相互付着が降水中で具体的に超す効果を観測によって明かにしようとすることが，今後の問題であろう，何れも充実した研究であった．海塩粒子が工業性ダストの上に，どの位の速さで消耗されるのか，南極の沈降気流中にある凝結核の特徴，レーダーと降雨強度の比をもたらす具体的な機構，南極での数珠玉状氷晶降水の機構等は，興味ある今後の問題であろう．

7. レーダおよび測器．発表時間は一人20分程度は欲しかった．このため討論が充分できなかった．地方や現業の方面での発表が少ししかないのは残念だった．

8. 放射．超高層および気象衛星と同時刻に行なわれたので，不都合を感じた人が多かった．エーロゾルの放射伝達の理論取扱いは，実際の大気に利用し得る数値が可成り得られて来た．エーロゾル粒子や雲粒子の散乱吸収の特性について，実用的な結果が可成り蓄積されている．これからエーロゾルや雲の性質を知ることもできる．連続した結果から大気の混濁度が年々増していることが判る．これが都会のみでなく，地方でも起って居り，バックグラウンド・ポリューションの問題が無視出来ぬことが判る．又高空における粒子は雨により洗い去られることなく蓄積してゆき，気候変動の因子となることも示された．エーロゾルの雲霧の発生消滅えの影響の

研究も必要である．放射の大気えの熱的効果の問題は極めて重要なるにも拘らず，力学との関係が極めて弱い点が考慮されねばならない．

II. 大会運営について

9. 項目の分類．レーダーが綜観と測器に入っている．大気汚染には大規模と小規模とがある．放射と超高層および気象衛星とが同時になった．応用気象と云う分類がやりにくい．これらの解決法として，講演申込用紙の分類を，従来の考え方から脱皮し，更に第1，第2希望の欄を設けてはどうか．

10. スライド．多くの図や式が次々と現れては消えて行くのは，討論や質問を充分にするには向かないのではないか．話す方もスライドを解り易く作り，余り多く使用しないで欲しい．綜観気象の様に，多くの図を比較するものでは，二台の映写機を使うのも一法ではないか．

11. 講演時間．項目が増すにつれて短かくなるのは止むを得ないが，現在のように，12分間でよく判るように話すことは可成り難かしく，聞いている方でも，実際よく判らぬことが多い．一人20分は必要ではないか．特に大学や研究所の人等はよいのかも知れぬが，地方会員や現場の人には，これでは殆んど判らないのもある．講演者が時間を無視して話すのは座長として甚だ困る．座長を無視したような質問や討論のやり方も困る．

12. 座長会議．第1日の座長会議は余り意味がない．地方側としては，大会の前日に企画委員や座長の顔を覚えておくような会の方が望ましい．例えば，今回16ミリ映写機を使用すると云うことを，当日になって云った人が二人あった．こういうのは非常に困る．委員の顔を知らないために困ることが度々あった．

13. 会期．講演時間を充分にするにはどうしたらよいか．（1）会期延長．さし当り現在の3日を3日半又は4日にする．この場合，出張旅費，会場費，運営費，地方側の人的負担等の解決法が問題となろう．（2）会場の増設．止むを得ぬ場合にのみ考えられるが，項目分類の問題がからんで来る．経費もかかる．（3）夜にも行う．疲れ過ぎること，他の会合がある．等で難かしい．（4）シンポジウムを春夏の講演会にまわす．これは在京会員にはよいが，地方会員のためにまずい．（5）代表講演．外国では既に行われているが，日本では現在の会員の風潮として，自分で話したいと云う希望が非常に強い，話さない人は，落とされたと感じるような気分もある．現状には合わない，理想論から云うと，会期を一週間位にして，その間に見学や旅行を入れて．会員同士が年一回集まって学問の交流を深め，顔を見るのが楽しみになるような，有意義な会合にすべきは当然であろう．然し経費の面で現在の様になっているのである．

III. 地方支部の問題点

14. 気象庁との関係．地方においては，事務ペースで或いは口先だけかも知れないが，程度の差こそあれ，事務系統の人の方が職員の学会出席に関して好意的で官として学会に出席することは当然だ，と明言する人もいる．一方技術系統の人で，当然下の人に対して，学会に出席しろと云うべきはずの人が却って消極的であり，時には批判的であったりもする．これは地区研究会が別にあるためもあり，又学会に出席する旅費が認められていないためもある．事実現場の技術者は殆んど発表もしないし，聴きにも行かない．ここに気象技術と気象学との間の断絶がある．

15. 気象官署における調査．調査と云う項目はあっても，人や予算がついていないから，体制としては全く出来る状態にはない．然し地区研究会はあるし，実際に多くの人々が調査研究を行なっている．そこで体制がないから出来ないと云う人と，仕事にも必要だし，やらずには居れぬ，と云う人と，二通りに分れている．然し実際にはこれは車の両輪であって，このために学会は気象庁にいろいろと勧告すべきではないか．

16. 地方での研究の方向．ローカルな地形的な問題，地方都市における公害の問題等はどうしても現地でしかやれない．従って気象研究所における基礎研究と遊離しないためには，研究所員と現地との話合いが極めて重要だが，一向に行われてはいない．研究所や大学えの内地留学が必要である．地方的な研究は地方でしかやれない．地区研究会には気象研究所や大学の人が出席されたい．大学や気象研究所では独自に世界的レベルの研究を続けて貰いたい．

17. 大学の問題点．大学の若手会に気象庁関係の人の出席が少ない．学生も気象庁の現場のことは全く知らない．学生側と気象庁の間の交流，例えば予報現業の見学等は学生の側から希望したい．